

國學院大學學術情報リポジトリ

Understanding the Verb SU in The Tale of Genji with Special Reference to the 'NP-O + NP-NI + SU' Construction

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000081 |

『源氏物語』の動詞「す」の読解

—ヲ格十二格+「す」構文への注目—

中村幸弘

一 辞典における「す」の取り扱い

改めて、山田孝雄『日本文法論』の形式用言と呼んでの取り扱い¹⁾や、松下大三郎『標準日本文法』の形式動詞と呼んでの取り扱い²⁾などを引くまでもなく、動詞「す」には、概念がない。したがって、その語義を紹介することは、そもそも、無理なことなのである。ただ、辞典は、語義を載せることを使命としているところから、何とかその期待に応えようとして、その任に当たった先達は、長く悩み苦しんできている。

『大言海』³⁾は、自動詞「す」と他動詞「す」とを別立項して、自動詞「す」に、極メテ広キ意味ノ自動詞 として、アル。起ル。感ゼラレル。という語義を挙げ、他動詞「す」については、その語義を業ヲ行フ。ナス。イタス。手ヲ下ス。としている。現在、例えば『日本国語大辞典 第二版』⁴⁾の「する」は、自動詞5プランチ、他動詞7プランチとなっていて、言い換え語の紹介だけではなくてきている。

あるいは、それ以前にも、そのような視点からの整理も試みられていたのかもしれないが、とにかく、森田良行『基礎日本語1』⁵⁾の「する」の項を見た瞬間、かつて感じたことのない共

感を感じたのであった。その日から、「AハCヲする」の「す」する、「BニCヲする」の「す」する、「CヲDニする」の「す」する「というように、古典語文についても現代語文についても、そう読解するよう努めてきている。

辞典として、その姿勢を採用したのは、三省堂『大辞林』⁽⁶⁾であった。殊に、そのプランチの第一用例「息子を医者にする」は、森田『基礎日本語¹⁾』の用例そのまま、あるものに育て上げる。意がよく理解できた。古語辞典として、この姿勢を探り入れたのは、角川書店『角川古語大辞典』⁽⁷⁾であった。以下に、念のため、両辞典の、森田のいった「CヲDニする」型の該当プランチを引くこととする。

「…を…にする」「…をとする」の形で、ある人がある身分にする。あるポストにつける。あるものに育て上げる。「息子を医者にする」「犬を友として暮らす」「孫を相手にして遊ぶ」ある物がある用途に使う。「腕を枕にして昼寝をする」「釣った鮎をさかなにして酒を飲む」ある物を…に変化させる。「小切手を現金にする」「大豆を臼でひいて粉にする」「…を…と見なす、考える。…扱いは、あの話はなかったこととして下さ」「…ひとをばか

にするにもほどがある」「自分で…を…と思つ、感じる。「遠足を楽しみにしている」「僕は君を頼りにしているんだよ」(『大辞林』「する」の)

「…を…にす」「…をとす」「…を…くす」などの形で用い、その物事や状態になす意味を表す。その物にならせる。なす。「梅の花咲きたる園の青柳はかづらに須(す)べくなりにけらすや」「万葉・八一七」「見てのみや人にかたらむ桜花手ことに折りていへつとにせん」「古今・春上」「この女御のはらめる子、男ならば臣が子とせん。女ならば朕が子とせん」「大鏡・道長伝」「打おりて何ぞにしたり氷柱かな」「曠野・五」そのように思う。扱う。「世中に多かる人をだに、すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ」「竹取」「たま かふるものは、金をかるくし、粟をおもくす」「方丈記」「あまりにほこりいさみ、世を世ともせざりけるつへ」「平家・一・天下乗合」「すさまじきものにして見る人もなき(冬ノ)月の」「徒然・一九」その状態にならせる。なす。「五節豊明の節会の夜、忠盛を闇討にせむとぞ議せられける」「平家・一・殿上闇討」「只有縁の機に信心を深くせん為

也」(沙石・四)「月と花比良の高ねを北にして」(曠野・員外)「モシ是は、安いものでござります。捨売すてうりにしても、根ね付つけぐるみでは、四五百がものはござります」(膝栗毛・上) (『角川古語大辞典』「す」の)

右の各用例を見たとき、無概念動詞「す」「する」は、構文によって、ある一定の概念を担わせられることになる、と感じとれるであろう。そして、辞典の、その取り扱いを見たとき、その構文を採用する背景に、どのような場面の共通性があるかなど、整理しておく必要を久しく感じてきている。

二 非表出のヲ格と想定されるヲ格成分と、そして、ヲ格十二格十「す」構文の「す」の訳出と

前引の『角川古語大辞典』の、そのプランチの第一用例・第二用例を見たとき、ヲ格十二格十「す」構文については、ヲ格に関して認識しておかなければならない変形が存在することに気づかされる。その一点は、ヲ格には非表出のヲ格が存在するという点であり、いま一点は、ヲ格成分とよいい文の成分そのものが想定によって補われる場合がある、ということである。

ある。

第一用例「…青柳はかづらに須すへくなりにけらずや」の「青柳は」その「は」によって青柳を提示している表現であって、格は、「青柳ヲ」となるところである。「ヲバ」ともなるところでもあるが、この用例のように、「は」だけでも表現できたし、現代語であつても、そのように表現できる。もし、また、その「青柳」が「青柳」であつたとしたら、そして、律文として五音節で表現する場合であつたとしたら、「青柳かづらにすべく…」と詠まれていたであろう。いずれについても、ヲ格の非表出である。

第二用例「…桜花手てごとに折りていへづとにせん」は、「桜花(ヲ)手てごとに折りて(ソノ)桜花ヲいへづとにせん」ということである。つまり、「ソノ桜花ヲ」というヲ格の文の成分を、そこに想定して読みとつていく一首だったのである。想定ヲ格成分を前提に、ここの第二用例となつていたのである。

それにしても、このプランチだけでなく、この動詞「す」には、『源氏物語』からの用例が、一用例も引かれていなかつたのである。『古典対照語い表』⁽³⁾で確認するまでもなく、『源氏物語』にも、相応の動詞「す」の用例は存在している。殊に、そのヲ格十二格十「す」構文を採用して表現する場面について

は、共通する場面が顕著に見えてくるのである。その各用例は、単純にそれと読みとれる用例が存在する一方に、格助詞「を」「に」の上が準体法による名詞相当語句であつて、読解に少々手間取る用例も存在していて、確かに辞典に引く用例としては取り扱いきいものもあるようである。

古典語動詞「す」は、その読解においては、決して容易とはいえない用例をも含めて、ほとんどすべてを、現代語「する」に言い換えるだけで、訳出しえたことになるようである。ただ、無概念動詞「する」に言い換えただけでは、概念の把握ができないままであつて、読解ができたとはいえないことになる。読解の手引きを研究の目標に据えることが許されるなら、この構文と作品の場面とを整理しようとする小稿にも、調査報告の機会が与えていただけであるうか。

どのようなテキストに拠つても、調査結果に違いはないのだが、本文の表記が現代人にとって穏やかであり、一定の現代語訳が施されている利便性もあるところから、新編日本古典文学全集『源氏物語』に拠つて作業を進めることとした。

x x x

動詞「す」の訳語については、『大言海』の大槻文彦も悩んだことであるう。語源を尊重した大槻だが、この動詞「す」については、言い換ええたところを列挙している、といつていいようである。北山谿太『源氏物語辞典』の「す」もまた、そこに引かれた用例に施された訳語の「思フ」などは、そう言い換えられるといふことなのであるう。今回このヲ格+二格+「す」構文の各用例に注目を続けた結果、その「す」を言い換える訳語として落ち着いたのは、位置づけるであつた。それは、二格の「に」をどう解するかにもよるであるうが、そこが、筆者には、…として位置づける というように、感じられてしまうのである。構文が、そう感じとらせるのであるうか。そして、それは、小稿の小さな結論の一つでもあるのである。

三 ある人物を親しい関係者として位置づける意となる動詞「す」

ここにいう、親しい関係者という、その関係者は、使用人から婿君までを含めた頼りになる人という関係者である。

源氏「かの、ありし中納言の子は得させてむや。らう
 だけに見えしを、身近く使ふ人に世む。……。」(帚木・
 105)

あれ以来、空蟬がどんな思いをしているか、気になった源氏
 が、紀伊守を呼び出して、あの中納言の子(＝小君)を私に任
 せてもらえないか、と言っているところである。かわいく見え
 たその子を身近に使う人にしたい、と、源氏が希望を表明して
 いるのである。

尼君「……あやしき身ひとつを、頼もし人にする人な
 むはべれど、……。」(若紫・218)

右の「あやしき身ひとつを、頼もし人にする」は、次の
 「人」の連体修飾語であつて、話者の尼君を頼みに思う人にし
 ている少女(＝後の紫の上)が、その「あやしき身ひとつを、
 頼もし人にする人」である。「あやしき身ひとつ」は、尼君が
 みずから指してそう言っていることになる。現代語において
 も、自分を当てにする(人)そのままて通用する表現であ
 る。

何かは、この君離れたまひなば、我を頼もし人にした
 まふべきにこそはあめれ、……など、ただ、このことのみつ
 とおぼゆるぞ、けしからぬ心なるや。(宿木・432)

右は、微妙な薫の心内文である。薫は、匂宮と中君との夫婦
 仲が絶えることをも想像し、期待していたのである。そうなつ
 たら、自分を頼りになさるにちがいない、という、不屈き千万
 な気持ちを書べた草子地である。

この若君を内裏にてなど見つけたまふ時は、召しまと
 はし、「ソノ若君ヲ」戯れがたきにしたまふ。(紅梅・
 42)

右の冒頭の「この若君」は、童殿上している大夫の君のこと
 で、匂兵部卿宮が、按察大納言(＝柏木の弟)の、その若君を
 遊び相手にしていらいっしやる、というのである。その「この若
 君」は、「戯れがたきに」の直上に、「ソノ若君ヲ」として想定
 されて、ヲ格+二格+「す」構文が確認される。

むすめの尼君は、上達部かむたちめの北の方にてありけるが、その人亡なくなりたまひて後、むすめのただ一人をいみじくかじづきて、よき君達きむたちを婿ムスにして思ひあつかひけるを、…。

(手習・300)

小野の僧庵の主人である母君の娘も尼で、彼女はかつて上達部の北の方だったが、夫亡き後、娘一人を育てていて、その娘に、立派な家柄の君達を婿に迎えていた、というのである。その位置づけるは、いっそう深められた読解として、迎えると解されることになろう。

「浮舟うきふね」容貌かたちの見るかひありうつくしきに、よろづの咎とが見ゆるして「ソノ浮舟うきふね」明け暮れの見ものにニしたり。(手習・323)

仏道に勤しみはじめた浮舟がお経を習い読みしている姿を見た尼君たちが受けとめた心象が、その「見もの」である。そこには、親しい関係が芽生えてきていて、身近な同居者の一人となっていたのである。新全集本は、そこを 明け暮れの慰めにして眺めている。と訳出している。さらにいえば、尼君たち

は、その関係に満足しているのである。

四 ある人物を一定の評価をした存在として位置づける意となる動詞「す」

ヲ格+二格+「す」構文の二格が、人物評価や待遇を表す表現となっている一群である。その評価や待遇は、高い評価や手厚い待遇を示す用例が大方であるが、低く遇する例も、若干、見られる。

…、まづこの君を光ひかりにニしたまへれば、…。(花宴・365)

「この君」は、もちろん、源氏である。作詩などにおいて、この君が断トツに優れていて、そこを新全集本は、この君を一座の光とお立てあそばす(のだから)と訳している。この訳語「立てる」は、高く評価して遇する というようなこととであろうか。

児こをわりなうらうたきものにニしたまふ御心なれば、

…。 () 松風・424

幼子を無性にかわいがりなさる、といふことで、「らうたきものす」で「らうたがる」に相当するを見てよいであろう。筆者は、ヨ格+ニ格+「す」構文の多くが、…人を…として位置づける と解せたところから、一旦、その訳出したうえで、この「し」(す)については、扱(う) 遇(あ)する べ(い)いに読みとりたいと感じている。旧来の注釈の多くが、思う と解してきているところである。

女の御心ばへは、この君を（ヲ）なん本（ニ）に（ス）扱（ウ）べきと大臣たち
定めきこえたまひけりとや。() 藤袴・346

女の心がまえは、この姫君(=玉鬘)をこそ手本にすべきだと、どちらの大臣もご評定あそばした、というところである。手本としてであるところからは、見習(まね)つ あたりまで読みとれてこようか。

姫君にこれを奉りたらば、（コ）コレ（ヲ）いみじきものに
扱（ス）たまひてむかし、と見たまふ。() 浮舟・155

「姫君」とは、女一の宮(=匂宮)とともに紫の上に養育された姉宮のことである。続く「これ」は、人称代名詞で、浮舟を指している。その女一の宮に浮舟を仕えさせたら、大事に扱ってくださいでしょう、というのである。

以下、その遇し方に少しく事情ある用例である。

国の内は、守（カ）のゆかりのみ（ヲ）こそは、かしこき
こと（ニ）に（ス）扱（ウ）めれど、…。 () 須磨・210

右は、明石の入道についての紹介のなかに見る、国司一般の傾向を述べているところである。国の守の一族だけを特別待遇するようだ、というのである。

右大将など（ヲ）をだに、心（ニ）にく（キ）人（ニ）に（ス）扱（ウ）めるを、何ばか
りかはある、…。 () 蛸・208

髭黒の大将などをさえ、玉鬘の婿として世間では立派な人物として位置づけているようだが、というところである。その位置づけている 部分を新全集本は、取り沙汰していると

訳出している。

監「」。さりとて、すやつばらを、等しなみにはしは
べりなむや。…。(玉鬘・96)

肥後の豪族・大夫の監が、田舎言葉で、自分がこれまでに關
係した女性たちを「すやつばら」と言つて、そのすやつばらと
こちらの女君(玉鬘)を同列に位置づけたりしましうか、
そんな位置づけはいたしません、と言つているところである。
新全集本は、そこを、扱いましうや」と訳出している。

人の上を難つけ、おとめさまのこと言ふ人をば、い
とほしきものにしたまへば、…。(蚩・208)

前出用例の直前にある表現で、花散里のもとに泊つた夜の
源氏の人柄を述べているところである。他人のことに關して難
をつけたり、さげすんだりするようなことを言う人を、困つた
ものと位置づけていらつしやるので、というところである。そこ
を、新全集本は、考え(て)いらつしやるので」と訳出してい
る。

五 ある居室を一定の目的をもつ居室に位置づける
意となる動詞「す」

該当用例は限られるが、その場面が鮮やかに読みとれる一群
である。

御前に渡れる廊を、楽屋のさまに、
を召したり。(胡蝶・172)

秋好中宮が御座所に通じる廊下を楽屋(この場合、御読経
の行事の控え室)の体裁にして、というのである。その「楽
屋の体裁に(して)は、(楽屋の体裁に)設え(て)とい
うようなことであらう。

辰巳の方の釣殿に続きたる廊を楽所に、
若菜下・278)

源氏と柏木との典雅な対面の場でもあった。その試楽の日の
設営について、述べているところである。

二の宮も、同じ殿の寝殿を時々御休み所にニしたまひて、梅壺を御曹司ニしたまひて、右の大殿の中姫君を得たてまつりたまへり。(匂兵部卿・18)

今上の皇子たちを紹介するなかで、その二の宮(明石中宮腹)がお下がり場所やお控え部屋をどこになさったかを述べているところである。どついつ居室をどのような居室になさったかを、連続して二組述べている点に注目したい。

この宮は、さうさうしくものあはれなるままに、一品の宮の御方を慰め所にニしたまふ。(蜻蛉・245)

一品の宮の御所には大勢の女房がいるので、そこにいう「慰め所」は、単なる部屋をいうものではないが、美人女房たちに心を癒やしてもらえるサロンということ、そういう雰囲気のある居室に模様替えなさった、ということになるであろう。

六 ある行為・行動さらに行事などを特定の心象を与える存在として位置づける意となる動詞「す」

そこにおいて与えられる心象については、芳しくない場合もあるが、もちろん、好ましい場合の事例もまた相応に存在する。

右近ニ…、人にもの思けしぶ気色を見えんを恥ツづかしきものにニしたまひて、…。(夕顔・186)

夕顔急逝の後、源氏が右近に夕顔の素性を尋ねた折の、右近の回答の一部である。夕顔は、人に物思いをしているように見られることを恥ツづかしがる性格だった、というのである。「恥づかしきものにす」が、動詞「恥ツづかしがる」に相当するわけだが、恥ツづかしいこととして位置づけなされて、ということ、その「し」(「す」)は、感じ(「感じる」)ぐらいであるうか。

柏木ニ…、今になほかなしくしたまひて、しばしも見えぬをば苦ツしきものにニしたまへば、…。(若菜下・283)

悩乱する柏木が、親たちに顔を見せないと親たちはそれをつらくお思いになるので、と言って、それとなく死を予告して、親たちの来訪を待つ柏木の発言のなかに見る用例である。この「し」＝「す」は、新全集本だけでなく、多くの通釈が「思（＝思つ）」と訳出している。

（老女房）かかるをりのこと、わざとがましくもてな
し、ほどの経る「ヨ」、なかなか憎きことになむ「はべり
し」など、古人も聞こゆれば、…。（） 椎本・175（）

八の宮のわび住まいと若い姫君たちとに空想がそそれ、匂宮が、一首の和歌を贈った。その姫君たちの脇で、このようなときのご返歌は手間取つてはいけなと、老女房が言っているところである。そこを、新全集本は、返歌が遅くなるのをよくないことと（世間では）申し（て）おりました（と）訳出している。

私さまのかかるはかなき御遊び「ヨ」も、めづらし
き筋にせさせたまひて、…。（） 絵合・392（）

私事のような些細な行事をも目新しい趣向として位置づけな

さつて、という源氏の全盛期を読みとらせようとしているところである。新全集本は、そこを、（目新しい趣向でお）催し（になって）と訳出していた。ここでは「せ」＝「す」が催し（＝催す）の意を担って来ていたのである。

字つくることは東の院にてしたまふ。…。上達部・
殿上人「字ツクルコトヨ」めづらしくいぶかしきことに
「して、我も我もと集ひ参りたまへり。」少女・23（）

二条東院で夕霧の字をつける儀式が行われた折の描写である。その「ヨ」格成分は想定して読む本文であるが、上達部や殿上人が、その儀式をめぐって見られないこととして位置づけ、我も我もと集まって参上してきていらっしゃる、というのである。その「し（て）」は、思つ（て）でも、理解し（て）でも、一往の読解をしたことになろうが、新全集本は「めづらしくいぶかしきこと」に続く「にして」部分を、とてどんな儀式かと好奇心がそそれ、と訳出している。もちろん、それは、もはや、現代語訳を超えた読解である。

大納言「…。琵琶は押手しつやかなるをよきにすも

のなるに、…「…」。紅梅・46)

「押手」は、柱むすこの上を左手の指で押し弾く手法である。その押手を静かに弾くのをよい弾き方としているものなので、というふうなところである。その「する」を敢えて訳出するとなると、大方が 評価する と訳出するのであろう。

七 ある人物を取り巻く話題性ある事柄を話題として位置づける意となる動詞「す」

当代の宮廷生活にあつては、どのような事柄を話題にするかや、どのような話題を蓄えておくかは、社会生活において、必須の準備態勢であつたであらうか。

おのおの、かう幸ひ人にすくれたまへる御ありさまを
物語ニにスしたり。(行幸・305)

内大臣がご子息たちなどと久方ぶりのご対面の酒席である。その折、めいめいが、幸いのこともまさつていらつしやる大宮のご境涯をその座の話題にしているのである。「物語にした

り。「の」は 取り上げ(て)ている。(べらいまで感じとつてもよい)ことには、語(て)いる。(べらいまで感じとつてもよい)ことにならう。そして、そこには、「物語」の「語り」との関係もあることにならう。

兵部卿宮たいめいにス対面したまふ時は、まつこの君たちの御事をあつかひニくさニにスたまふ。(椎本・202)

中納言(= 薫)は、兵部卿宮(= 匂宮)と対面なさるときは、何よりも先に、「この姫君たちのことを話題になさる」というのである。「もてあつかひくさ」の「くさ」は、材料を意味する接尾語で、その点からも、その「し」は 取り上げ などと言ひ換えられていよう。

備都 ……、めづらしき事のさまにもあるを、(ソノメツ)
ラシキ事ノサマヲ(ト)世語よにもスはべりぬべかりしかど、
…「…」。(夢浮橋・377)

「めづらしき事のさまにもあるを」「の」「ある」を準体法と見て、その語句をそのままヲ格成分と見ることでもできようかとも

思うが、いま、そのヲ格成分については、改めて想定して読んでいくこととする。その「ソノメヅラシキ事ノサマ」は、浮舟の入水以来の、この横川での生活までの始終を指している。その彼女の数奇な運命を世間話の種にしようと思ったこともあったが、と言っているところである。

八 ある原材料を人工的な製品に位置づけたり、ある物品を贈り物として位置づけたりする意となる動詞「す」

小稿第一章において紹介し、第二章において、若干解説を施した、『角川古語大辞典』の動詞「す」のプランチの第一用例は、原材料「青柳」を人工的な製品「かづら」に位置づける意の動詞「す」を用いた一首であった。その第二用例は、原料といってもいい植物「桜花」を贈り物「いへつ」として位置づける動詞「す」を用いた一首であった。以下に、『源氏物語』のなかの、その類例を挙げていくこととする。

…、わが御髪みかみの落ちたりけるを取り集めて（ソノ）落ちたりケルワガ御髪みかみヲ（ヲ）鬘かづらに（ニ）したまへるが、…。（蓬生・

341）

右の「わが御髪の落ちたりけるを」は、続く「取り集めて」の補充成分であって、「したまへるが、」にかかっていくヲ格成分ではない。そこで、厳密には、想定ヲ格成分を想定して読んでいくことになる。新全集本は、そこを、こしらえ（ておかれたのが）と訳出している。

野のにとまりぬる君達きみたち 小鳥こどりしるしばかりひきつけさせたる荻あしの枝えだなど（ヲ）苞かぶに（ニ）参まれり。（松風・418）

鷹狩を行い、旅寝をして夜を明かした若殿たちが、獲物の小鳥を、ほんの少しばかり結びつけた荻の枝などをお土産として参上した、というのである。小鳥を結びつけた荻の枝に変わりはなく、それを取り扱いとして「苞」に変身させているのである。

…、かの御料ごりょうにとてまつけさせたまひける櫛くしの箱はこ一具ひとしほ 衣箱いばこ一具ひとしほ（ヲ）贈物おくりものに（ニ）せさせたまふ。（蜻蛉・229）

亡骸なまがらなき浮舟の葬儀が営まれた。匂宮は病床に侍従を呼んで事情を聞く。その侍従が帰るので、「かの御料とてまうけさせたまひける櫛の箱一具、衣箱一具、つまり、浮舟のお召し料として用意させておいた櫛の箱や衣箱を贈り物としてお与えになったのである。贈り物として「せさせたまふ。」というのであるから、その「せ(=す)」「は、与え(=与える)」であつて、新全集本も当然そうであつたし、多くがそうであつた。確認していない通釈のなかにも、それは多いであらう。そして、「贈物」の「贈り」との関係もあつたのである。

九 なおも多様な用例を見せるヲ格十二格十「す」
構文

小稿の第三章から第八章までに、六類のヲ格十二格十「す」構文の「す」を取り立ててきたが、『源氏物語』に現れるヲ格十二格十「す」構文の「す」は、まだ多様である。整理のしかたにもよるが、バリエーションともいえる用例も加えなどとすると、さらに、二十枚ほどのカードが手許に残っているのである。

まず、この構文は、あるいは偶然かとも思うが、その用例頻

度が極端に低い巻や、まったく用例を見ない巻もあつた。若菜上は、あの長い巻に、確か、一用例を見ただけだつた。その一方に類例の続くところもあつて、そういうことも気になる構文である。そこで、辛うじて、六類だけ整理できた、という次第ではある。

とにかく、未整理の、この構文のなかには、まず、何とも読みとりにくいヲ格成分があつたりしたのである。加えて、その動詞「し(=す)」「には、補充成分が付いてもいたのである。

源氏「……さしてかくくわんま官爵をとられず、あさはかなることにかかづらひてだに、公のかしこまりなる人の、ううつじうさまにて世の中にあり終るあひ」は、咎重とむしきわざきに外に国にもしはへるなるを、……」(須磨・165)

そのヲ格成分は、話者である源氏自身の罪をいつているわけで、はっきり官位を取り上げられることもなく、いささかの軽い罪を受けただけで、朝廷の勳気をこうむって謹慎しているだけで、日常生活をこの世の中で続けている私のような罪を、というのが当たることになる。そのような罪を、日本だけでなく、外国でも罪深いことに位置づけて、判断したり、処罰

したりしているとかいうことですので、というのであろう。
さて、時には、卑劣な脅迫ネタを擲んだときも、この構文を
用いて、何かの場合の「おどしぐさ」にしようと思ったりもす
るのである。

中将は、妹の君にも聞こえ出です、「源氏ノ源典
侍トノ一件ヲ」たださるべきをりのおどしぐさに世むと
ぞ思ひける。() 紅葉實・346

「中将」とは、源氏の友人の頭中将で、したがって、その
「妹の君」とは、源氏の正妻・葵の上である。好色な老女・源
典侍との源氏の交渉を知った中将は、誰にも喋らず、ただ、し
かるべき折のおどしの材料にしようとして、心に蔵っていた、
というのである。この「せ」は、蔵（ておこつ）とか、
隠（ておこつ）とかに、言い換えたくなるようである。
次に、疑問文 さらにいえば、反語の表現 のなかに用いら
れた、この構文に準じるヲ格+ト格+「す」構文の用例を挙げ
ておくこととする。

源氏「…、琴の音を離れては 何ことをか物をととの

へ知るしるべとは世む…」。 () 若菜下・199

琴に執しての、源氏の文明批評のなかの発言である。琴の音
を基準としなかったら、どのような楽器を用いて音調を弁える
ことができようか、できないだろう、というのである。この場
合の「せ」＝「認め」＝認める（なごとも、用い）＝
用いる（なごとも言い換えられようか）。

最後に、ヲ格+二格+「す」構文の、その「す」の部分に似
ていて非なるバリエーションを引いておこつと思つ。そもそ
も、動詞「す」には、補助動詞用法の「す」が多いのである。

大内記「…、あわたりに領じたまふ所どころの人、
みな仰せにて参り仕まつる」ヲ格、宿直にさし当てなご
つつ、京よりもいと忍びて、さるべきことなど問はせた
まふ、…」。 () 浮舟・114

薫の所領の部下の者たちが、殿のお言い付けで参上してご奉
仕もつじあげている、その人々を宿直の担当に従事させてと
いつているところである。「仰せに参り仕まつる」ヲ格、宿直
つつ、「とも表現でき、そうであったら、ヲ格+二格+

「す」構文となるのだが、あるいは、その「し」のところにも具体的な意味を表す「さし当て」を用いて、さらに副助詞「なご」を添え、補助動詞「し」を用いることになってしまったのであるうが。

このヲ格＋二格＋「す」構文の整理には、『源氏物語』に現れる用例についてだけでも、なお、スペースが必要である。

十 ヲ格＋「す」と二格＋「す」と、そして、それから動詞「す」が担う意味と

動詞「す」は、ガ格＋「す」の自動詞群を切り離したうえで、一般に他動詞とする「す」について、ヲ格＋「す」でどういふ語義を構成するか、二格＋「す」でどういふ語義を構成するかが整理されていなければならない。ヲ格＋二格＋「す」の読解は、その後に見えてくることになるうと感じている。その一方で、補助動詞用法の「す」が、徹底して整理されていなければならぬとも思っている。

既に述べてきているように、動詞「す」は、無概念である。その「す」は、ヲ格＋「す」、二格＋「す」、さらには、ヲ格＋二格＋「す」などの、各構文によって、それぞれにそれぞれの

意味を担わせられているのである。いま、求められているのは、どのような構文の「す」は、どのような意味を担わせられているかの整理だったのである。

註

- (1) 山田孝雄『日本文法論』(宝文館・明治四十一年)。
- (2) 松下大三郎『標準日本文法』(紀元社・大正十三年)。
- (3) 大槻文彦『大言海』(富山房・第一卷)昭和八年。同じ大槻の著『言海』(明治十九年成稿)を大幅に増補したもので、大槻の没後、大久保初男らが継承して完成した。
- (4) 小学館『日本国語大辞典 第二版』(第7巻)二一年)。
- (5) 森田良行『基礎日本語1』(角川書店・昭和五十二年)。
- (6) 三省堂『大辞林』(一九八八年)。
- (7) 角川書店『角川古語大辞典』(第二卷)昭和六十二年)。
- (8) 宮島達夫『古典対照語い表』(笠間書院・昭和46年)に載る『源氏物語』の動詞「す」の用例数は、3060例となっている。
- (9) 大槻が語源記述を尊重したことは常識であるうが、『言海』巻首の「本書編纂ノ大意」には、「発音、語別、語原、語積、出典」が辞書の言語の解には必要だ、とある。
- (10) 北山谿太『源氏物語辞典』(平凡社・昭和三十一年)。
- (11) 拙稿「補助動詞「す」の論」(『國學院雜誌』第七十五卷第六号・昭和四十九年)は、八代集を資料にしたものであるが、『源氏物語』など、散文資料には、副助詞「なご」を介在させるために用いられている補助動詞「す」が大量に存在する。

刊行年などの数字表記は、それぞれの著作物の奥付に従うこととした。